みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

社会主義をへた宗教復興のゆくえ：共同研究【若手】：内陸アジアの宗教復興―体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開 （2010-2012）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤本, 透子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4919

PROJECT

社会主義をへた宗教復興のゆくえ

文・写真
藤本透子

共同研究【若手】● 内陸アジアの宗教復興
――体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開（2010-2012）

現代を読み解く上で、宗教の動態はひとつの重要な鍵である。とりわけ社会主義を経験してきた諸地域では、宗教が社会的に重要性を増して復興しているばかりでなく、越境空間の拡大にともなって新たな展開をみせるようになっている。ここでいう宗教復興とは、メディアでとりあげられる「宗教的過激派」というより、むしろ日常生活のなかで静かに高まりつつある宗教への関心をさしている。旧ソ連、中国、その周辺諸国にまたがる内陸アジアは、そうした宗教復興が社会再編のなかで生じている地域である。

イスラームの婚姻儀礼（カザフスタン、エキバストゥズ市）。ソビエト時代に定着した役場での婚姻登録や、現代的なレストランでの披露宴に加え、モスクで婚姻儀礼を行うカップルが増えている。

社会主義はひとつの近代化のかたちであり、社会主義と宗教の関係性を問うことは広く近代と宗教の再考につながる。かつて近代化の進展とともに宗教は衰退するといわれたが、宗教が力を失わず復興すらしている地域が少なからずあることから、世俗化論の限界が指摘されてひさしい。近代化が進展するなかでの文化の政治、エスニシティやナショナリズムの高揚、聖典に書かれた信仰の原点への回帰などのさまざまな要因から宗教復興が説明されてきた。

宗教が社会的に重要性を増す理由は、その地域や宗教のもつ特性、さらに時代の変化によっても刻々と変化する。越境と流動化の進む現代社会で、なぜ宗教が復興傾向を強めているのかは、いまだ充分には解明されていない新たな課題といえよう。本研究は、社会主義をへた内陸アジアの越境空間において、宗教が社会再編のなかで復興しているメカニズムを明らかにすることを目指している。

社会主義と宗教の相克/共存

内陸アジアとは、テュルク系の人々が多く暮らす中央アジアから、モンゴル、チベットにかけての地域をさす。この地域はイスラーム、チベット仏教、上座部仏教、ポン教、シャマニズムなどが信仰され、歴史的に行き来がさかんでひとつのまとまりをもった世界であった。しかし18〜19世紀に近代国家によって分断され、やがて20世紀には、複数の国家のもとで社会主義体制を経験したのである。

社会主義国では宗教が完全に否定されるように受けとめられがちだが、実情はより複雑である。政策面でどの程度まで宗教が否定あるいは許容されるかは、国や地域、年代、宗教によってかなり異なる。政府の建前と実際の取締りに乖離がある場合も多い。

神はいないとする「科学的無神論」に基づいてはげしい反宗教政策がとられたのは、旧ソ連領中央アジアでは1920〜1930年代であり、1940年代半ばには政府公認のイスラーム体制が整えられ、限られた範囲で宗教実践が許された。中国では、1949年の共産党政権樹立直後には信仰の自由が保障されたが、1960年代の文化大革命などで宗教施設が破壊された。旧ソ連でも中国でも宗教復興が進展し始めたのは1980年代に入ってからである。1991年に独立し社会主義体制から移行した中央アジア諸国では、モスクの急増など公的な宗教復興がみられたが、その後の展開は、政府による統制が比較的強いウズベキスタン、比較的弱いカザフスタンなど国によって異なる。また、中国の一部の地域では、宗教が再統制される傾向もみられる。

社会主義国の公式見解では、社会主義が人々の暮らしの隅々にまで浸透すれば、宗教はなくなるものとされていた（たとえば Ro'i 2000：10-11）。実際、ソビエト時代の中央アジアでは生産の集団化・国営化が進められ、宗教実践の基盤であった父系クランや職人集団は経済的重要性を減じた。現地の人々は、社会主義のもとで国家から給与が保障され安定した生活を得られたことを評価する。しかしその一方で、特に村落では、共産党員であっても礼拝や宗教的儀礼を遂行する場合が少なくなかった。社会主義のみで人々の生活全般にわたる欲求を充たすことはできず、社会主義と宗教実践の一種の共存状況がうまれていたのである。

こうした歴史的文脈をふまえると、現代の宗教復興を、抑圧されていた伝統文化が社会主義以前そのままのかたちで表面化したとみなすことはできない。社会主義時代の村落部における宗教実践の連続と変容、都市部を中心とした断絶など

をへて、宗教が社会･経済的基盤との関係性を変化させながら復興していることがわかってきている。

越境空間の拡大のなかで

ソ連崩壊･中央アジア諸国独立以降の新たな宗教動態は、ソビエト時代の分析枠組みであった、国家に公認されたイスラームと民間のイスラームという二項対立的な理解では読み解けず、国家と複数の立場にたつ人々の交渉の過程として検討する必要がある（Rasanayagam 2006）。本研究ではこの指摘をふまえながらさらに歩を進め、ソ連崩壊後に拡大した越境空間のなかで、宗教動態を検討している。

20年前に旧ソ連の社会主義体制が崩壊したことは、国境を越えた移動の増大をもたらした。もともと内陸アジアとその周辺地域では、近代国家の成立によって国境線がひかれる前からのつながりに基づき、政治情勢に変化があるたびに、国境を越えた大規模な移動が生じてきた。ソ連崩壊をへた現在では、欧米や中東などを含めたさらに広範な地域を舞台に移動が活発になりつつあるのである。

この越境空間の拡大が宗教の動態といかに関係していくのかを、本研究では徐々に明らかにしている。今堀恵美（特別講師）は、ウズベキスタンにおけるハラール食品（イスラーム法に基づいて合法とされる食品）の流通を、トルコ系資本の商業進出とも関連づけつつ、2000年代のイスラーム復興の新たな展開として指摘している。私自身が長期調査したカザフスタンでは、エジプト系やトルコ系の宗教施設の開設や、トルコ、イラン、モンゴルなどからのカザフ人の「帰還」が万単位で生じるなどの越境が顕著で、イスラームの動態と今後どう関わっていくかが注目される。

また、中国の越境と宗教の動態について、小西賢吾は中国四川省のポン教寺院、小島敬裕は中国雲南省徳宏州における上座仏教の断絶と復興、王柳蘭は雲南系タイ人ムスリムを対象に宗教ネットワークを分析し、越境が宗教復興を促す現象を指摘している。

ハラール肉加工品（ウズベキスタン、タシュケント市）。近年「正統な」イスラーム実践への関心が強まり、国内で製造が活発化した（2010年、今堀恵美撮影）。

越境を経験している諸社会を、多様な主体が相互行為によって生成していく場と捉えることで、越境が各地域の宗教の存続を支えたり、グローバル/ローカルな宗教復興の同時発生を促すなど、国民国家の枠組みを超えた地域社会と宗教の多元的な再編過程が明らかとなりつつある。

生と死からの展望

また本研究は、たんに構造的な変化を指摘するだけではなく、人の生と死をめぐる宗教実践のあり方に迫ることを試みている。たとえば内モンゴルでは、病気治療をめぐってシャマニズムが再活性化する現象が生じていることを、趙芙蓉は指摘している。私自身は、ライフヒストリーの語りから宗教の動態を読みとる分析を行い、ムスリムになるための儀礼である割礼が実は多様な解釈のもとでさかんになっていることや、イスラーム復興と死者儀礼の複雑な関係性などを示してきた。

都市に新築されたモスク（カザフスタン、パヴロダル市）。中東を含め国内外のムスリムの寄付を募って建設。やや風変わりなモスクのかたちは公募で決められた。

中央アジアのムスリムのあいだで、ソビエト時代に行われた「市民葬」は、現在ではきわめて否定的に語られる。「市民葬」とは、無神論に基づきトランペットなどの楽器演奏や献花によって、ソビエト市民として故人を葬送するものである。共産党幹部らが「市民葬」で葬られたが、多くの人々はイスラームの葬送礼拝を行って埋葬されることを重視し、「市民葬」が社会的に深く根づくことはなかった。さらに、菊田悠がウズベキスタンの事例から指摘するように、死者（とくに祖先）の霊魂が生者に影響を与えるという観念が中央アジアには広くみられる。この観念は本来イスラームの教義に反するが、死者のため油脂の香りを漂わせながら儀礼的な揚げパンを作ってクルアーンを朗唱することが善行とみなされるなど、宗教復興のなかでさかんになっているのである。

小島敬裕が指摘する中国雲南の上座部仏教徒などにおいても、死者のための宗教実践は重要であり、異なる宗教、異なる社会主義、異なる地域社会で、こうした現象がどのように展開するのか、比較研究が待たれる。

生と死をめぐって、近代化が人の欲求のすべてを充たすことはできなかったからこそ、宗教はさまざまなかたちでたち現れるといえよう。とりわけ体制移行や越境という体験は、社会生活の再構築を迫ることによって、生と死、病、性といった人間存在の根本にかかわる問題を顕在化させる。現実の不確定性が増大する状況のもと、近代化が捨象してきた諸問題に直面し生について答えを求める個々の主体の錯綜した営みのなかで、多様な宗教実践の共存と相克がみられることを示していきたい。

【参考文献】

Rasanayagam, Johan. 2006. Post-Soviet Islam: An Anthropological Perspective (Introduction). *Central Asian Survey* 25(3): 219-223.

Ro'i, Yaacov. 2000. *Islam in the Soviet Union: From World War II to Perestroika*. New York: Columbia University Press.

ふじもと とうこ

先端人類科学研究部機関研究員。専門は中央アジアの文化人類学、ポスト社会主義の社会再編、イスラーム復興。著書に『カザフの子育て：草原と都市のイスラーム文化復興を生きる』（風響社ブックレット 2010年）、『よみがえる死者儀礼：現代カザフのイスラーム復興』（風響社 2011年6月刊行予定）、論文に"Kazakh Memorial Services in the Post-Soviet Period"（Takako Yamada and Takashi Irimoto eds. *Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies*, Hokkaido University Press, in press）など。